

要 旨

本書は、異質的家計を含む動学一般均衡世代重複モデルの数値的解析手法を用いて、日本の家計貯蓄率の長期的動向を分析する。

日本の家計貯蓄率は、1990年代から2000年代にかけ、10%台の高い水準から5%以下の水準に大きく変化した。家計貯蓄率は一国の資本形成や政府債務の持続可能性に影響する基本的な変数である。まず第1章では、日本の家計貯蓄率に関する先行研究を本書の関心に沿ってレビューする。次に第2章では、代表的家計の動学一般均衡モデルによる分析を解説し、家計異質性を捨象することによって生じる分析上の不足点を明らかにする。

本書の中心となる第3章では、異質的家計（非代表的家計）を含む世代重複モデルを展開し、その数値計算結果を分析する。世代重複モデルでは同一時点で年齢を異にする家計が共存する。家計は年齢に依存する賃金や公的年金制度に応じてそれぞれの貯蓄計画を立てるが、賃金や金利といった家計の経済環境は、時代を共にする他の世代の貯蓄行動からも、市場を通じた影響を受けることになる。

本章のモデルではさらに、同一コホート内の家計にも異質性があることを考慮する。特に、家計は労働供給に関して自身では完全にヘッジすることのできないリスクを負っている。就労リスクなどの労働供給リスクは、労働所得に直接影響して家計の資産形成に事後的なばらつきを生む。さらに、将来の就労にリスクがあることは、家計の予備的貯蓄動機を生み、予備的貯蓄動機は低資産層ほど大きい。したがって労働供給リスクは、個別家計の貯蓄行動と家計の資産分布の両方を通じてマクロの家計貯蓄率に影響する。このような予備的貯蓄のマクロ的効果を内的整合性のある経済モデルで分析しようとするならば、異質的家計モデルを避けることができない。

第3章のもう一つの特徴として、連続時間モデル分析を取り入れている。そのため本章は連続時間・異質的家計マクロモデル分析の紹介という側面も持つ。連続時間モデル分析は、マクロ経済に対して数理的にエレガントな表現を与えるほか、数値計算の効率を向上させる可能性も指摘されており、近年進展の著しい分野である。

第3章のモデルの数値的分析により、異質的家計を含む動学一般均衡世代重複モデルは、1990年代以降の日本の家計貯蓄率の低下の主要な部分を説明できることを示す。モデルによれば家計貯蓄率低下の原因は、生産性成長率の低下と少子高齢化の進展である。このうち人口動態変化の影響は現在もまだ収束しておらず、今後もマクロ貯蓄率を引き下げて長期的にゼロを緩やかに下回ることが示唆される。第4章では結論と分析上の今後の課題を述べる。

以 上